

『栄花物語』正篇に見える源倫子の参内記事：
その位置付けをめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 藤原道長 キーワード (En): 作成者: 平井, 一博 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-119

Title	『栄花物語』 正篇に見える源倫子の参内記事：その位置付けをめぐって
Author	平井, 一博
Citation	文学史研究. 37 巻, p.8-16.
Issue Date	1996-12
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

『栄花物語』 正篇に見える源倫子の参内記事

— その位置付けをめぐって —

平井 博

はじめに

『栄花物語』は、道長一族の栄華（法成寺造営に代表される宗教生活も含めて）を核として、貴族社会の諸相を描く中で九条流藤原氏発展の歴史を辿っている。彼らの権力基盤は天皇家との身内関係にあり、それを持たぬ者は実権を握り得なかった。貴族たちにとって、自家と天皇家とを結ぶ後宮という場所の持つ意味は重大である。

『栄花物語』には、臣下の妻が内裏に参入し、後宮入りした娘たちの許を訪れている記事が散見する。特に正篇ではそれが源倫子に集中している点を重視したい。倫子は藤原道長の正室であり、四人の皇妃と二人の摂関の母となった人物である。娘を後宮に貼り付ける事によって道長の政権は確立・維持されたのであり、後宮という場所の果たした役割の大きさを思えば、その妻が親しくそこへ出入りする姿は簡単に見過ごしてよいものではないであろう。一族の栄華を描く中で、妻の参内記事はどのような意味を持つのか。倫子を例として『栄花物語』におけるその位置付けを考察してみたい。

一、正篇における臣下の妻の参内

先述したように、『栄花物語』正篇で臣下の妻の参内は藤原道長室源倫子に集中している。

① 卷八「はつはな」上巻二五四頁¹

殿の上もその日（彰子ノ懷妊ヲ）聞せ給まゝに参らせ給て、いとどしういたはしうやゝましげに扱ひきこえさせ給。

② 卷八「はつはな」上巻二七三頁

（中宮彰子ノ）御輿には、宣旨君乗り給。糸毛の御車には、殿の上、少将の乳母、若宮抱き奉りて乗る。次々の事どもあれど、うるさければかゝずなりぬ。

③ 卷八「はつはな」上巻二七六頁

かくて臨時の祭になりぬ。つかひにはこのとのゝ権中将（教通）出で給。その日は内の御物忌なれば、殿も上達部も、舞人の君達も、皆夜居に籠り給て、内わたり今めかしげなる所々あり。殿の上もおはしませば、御乳母の命婦も、おかしき御遊に目もつかで、使の君をひとへにまぼりたてまつりたり。

④ 卷八「はつはな」上巻二八八頁

との上は、中宮（彰子）とこの女御殿（妍子）とを、おぼつかなからず渡り参らせ給程も、いとあらまほしうなん。

⑤ 卷十一「つぼみ花」上卷三五五頁

かゝる程に、三月廿余日に石清水の臨時祭に、若宮（禎子内親王）の御乳母、内にえ候まじき事やありけん、俄に出し奉らせ給。殿の上添ひて率て奉らせ給。

⑥ 卷十四「あさみどり」上卷四一八～四一九頁

さて（後一条帝ト尚侍威子ガ御帳台ニ）入らせ給ぬれば、殿の上おはしまして、御衾参らせ給程、げにめでたき御あへものにて、理に見えさせ給。入らせ給て後の事は知り難し。

⑦ 卷十六「もとのしづく」下卷三四～三六頁

かくて参らせ給ぬれば、（東宮敦良ハ）あはたゞしきまで心もとなく、疾く／＼とそゝのかし給はする程も、との上「あさましう、物恥もせさせ給はぬよ」と、をかしくおぼす程に、やゝ夜更けて（嬉子ガ）上らせ給へるに、いつしかとかひ／＼しうむげに世馴れたる男の有様におはしますも、あさましうこの御前はおぼし見奉らせ給。御衾は例の上の御前参らせ給ふ。

（中略）上さへ十余日ばかり添ひ奉らせ給ひて、今は心安く里に出でさせ給ぬ。

以上の七箇所であるが、ただこれらを全て同列に扱って論じる事は危険であろう。『栄花物語』は作り物語と違い、原資料の存在という事を念頭に置いておかねばならない。すなわち、特に年紀の明確な事項に関しては行事記録のような原資料が存在し『栄花物語』はそれを写したに過ぎない場合があり得るという事である。現に

②と③は『紫式部日記』を原資料として用いた事がはっきりしている。行事記録をそのまま引き写しただけのような記事の場合、そこに登場する一人物の行動に意味を認めてよいのかどうか慎重になる必要がある。右の記事のうち、②は御産を終えた中宮彰子の内裏還啓、③はそれに引き続く賀茂臨時祭、⑤は禎子内親王の内裏退出、⑥⑦は娘の女御参りという公式行事の中に倫子が登場するに過ぎない。またこれらは皆物語自身に年紀の記載があり、史実としては年月日まで明らかなるものばかりである。⑤のみは他書に見られず確認が取れないが、内親王の内裏退出となれば多くの官人が供奉する公式行事となるから、何らかの資料があったと考えるのが妥当であろう。これらに対して①④の記事は質が違ふ。①は寛弘五年の記事の中に置かれているが、この前に、彰子の様子から懐妊ではないかと察した一条帝がそれを彼女に確認し、道長が参内した折帝自ら彼に告げるという話が記される。帝が彰子に尋ねる言葉から一月二十日頃である事が分かるが、それが道長に伝わるのは「殿参らせ給へる折」であつて、ここで場面が一度変わっている。大体、記事の性質から言つても懐妊の初期であればいつの事であろうと構わない話題と言えよう。また④は次女妍子が東宮居貞（後の三条帝）の後宮に入つた記事の直後に置かれているが、倫子が中宮彰子と東宮妃妍子の許にしばしば出入りしていた事を記しているのだからある程度の期間を概観しての記述であり、もとよりこの時だけに限定される性質のものではない。この二例は公式行事でなく娘の世話というごく日常的な用事のため後宮を訪れている記事であり、それだけに行事記録のようなものの存在が考えにくく、また実

際伝聞や記憶さえあれば原資料が存在しなくとも書き得る記事である。以下、主にこの二例を中心として話を進めたい。

なお、正篇においても一人だけ、内裏に出入りする記事を持つ臣下の妻がいる。重明親王の室であり、村上中宮安子の同母妹の藤原登子である。「式部卿の宮の北の方は、内わたりのさるべき折ふしのおかしき事見には、宮仕ならず参り給けるを」(巻一「月の宴」上巻三七頁)とあり、年紀の記載が見えない点から言えば右の二例と同類と言えよう。ただこの記事は、夫重明と姉安子の死後彼女が村上帝の寵愛を受ける事となるその発端として、帝の垣間見を記した部分の冒頭である。登子は物見のために参内したに過ぎない。村上帝の後宮には重明親王女である徽子女王もいるが、登子腹でもなく、従ってこの人物と登子の参内とは無関係である。娘の世話のため参内する倫子の記事とは質が違うと言えよう。正篇中倫子を除く臣下の妻の参内記事はこの一例しか見られない。続篇に入ると他にも見られるようになるが、これについては後述する。

史実の上で臣下の妻の参内を見てみると、倫子は夫道長の日記が残っているため数多く拾い得る。倫子単独の事もあれば道長と同伴の事もあり、時には娘たちが里下りなどで後宮にいくとも、おそらくは孫の皇子女の世話のため出入りしている記事も見える。夫と同伴の時には彼の直廬(飛香舎)に泊まる事もあり、まさに後宮へ自在に出入りしている感が強い。ところがその他の女性について確認できる例は僅かである。拾い得た限りの例を次に掲げておく。

○高階貴子(夫、藤原道隆 高階成忠女 一条皇后定子母)

『枕草子』一〇〇段 九九頁

淑景舎(原子)、東宮(居貞)に参り給ふほどのことなど、いかめめでたからぬことなし、正月十日に参り給ひて、御文などはしげう通へど、まだ御対面はなきを、二月十余日、宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房などみな用意したり。

夜中ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもあらで明けぬ。

登花殿の東の廂の二間に、御しつらひはしたり。殿(道隆)、上(貴子)、暁に一つ御車にて参り給ひにけり。

○盛子内親王(夫、藤原顯光 村上帝皇女 一条女御元子母)

『日本紀略』一条 長徳二(九九六)年十一月

十四日庚辰。右大臣顯光ノ女元子初メテ内ニ参ル。ハ承香殿ノ牛車ヲ仰ス。母氏天曆ノ盛子内親王同車シテ参ラル。仍テ之ヲ仰ス。

○藤原繁子(夫、藤原道隆 後平惟仲に嫁す 藤原師輔女 一条女御尊子母)

『権記』長保二(一〇〇〇)年八月廿日条

此日御匣殿別当女御ト為スベキノ事、朝餉ニ於テ勅命ヲ奉ズ、退出ノ間、女御ノ母氏暗戸屋ノ曹司ニ在リ、予ニ纏頭セント欲ス、予其ノ気色ヲ見、直ニ退キ陣ニ向フ、此事ヲ仰スノ間、彼曹司ヨリ從女ヲ差シ、若雄丸ヲ招カシム、若雄丸進向セズ、從女只女装ヲ持チ空シク曹司ニ帰ル、見ル者嘲リノ色有リト云々、

『同』長保三(一〇〇一)年六月廿二日条

此夜宿侍、前典侍、参入、太宰府ニ向フノ由ヲ申ス、仰セニ預リ内蔵寮御重ヲ給フ、左馬寮口鹿毛ヲ召シテ之ヲ給フト云々、

『小右記』寛弘元(一〇〇四)年七月一日条

允亮朝臣法家□□ヲ談シテ次ニ云フ、(中略)帥芹ヲ兩府ニ獻ズ、又妻ノ三位御所ニ候ス、内外ノ謀略太ダ高ク、如今神威無キニ似タリ、(後略)

高階貴子は中宮定子と東宮妃原子の対面のため、盛子内親王は娘の女御参り、藤原繁子は娘の女御宣下と夫の任太宰帥に伴う罷申しのための参内である。繁子の三例目のみは夫平惟仲が宇佐八幡宮と悶着を起こしていた時のものでいささか質が違うが、元々典侍であった彼女は女官として内裏にあり、夫の有利になるよう何らかの働きかけをしていたのだらう。これを除く他はすべて公式行事に伴う参内であり、倫子の場合と同類にはならない。公式行事によらないものは以下の通りである。

○藤原登子(夫、重明親王 藤原師輔女 村上皇后安子同母妹)

『蜻蛉日記』上巻

この御方(登子)、東宮(守平、後ノ円融帝)の御親のごと
してさぶらひたまへば、(内裏ニ)まゐりたまひぬべし。

○藤原伊尹女(夫、藤原為光 花山女御低子継母)

『小右記』永観二(九八四)年十二月十九日条

或者云フ、大納言為光ノ妻輩ニ乘リ内ニ参ル、名ヲ一条尼君ニ
仮ルト云々、又大納言延張車ニ乘リ朔平門ノ陣ノ下ニ列スト云
々、件ノ両事大イニ奇シブベキ事也、

○藤原原子(東宮居貞妃 藤原道隆女 一条皇后定子同母妹)

『小右記』正暦四(九九三)年三月廿七日条

摂政二娘(原子)今夜内ニ入ル、或ハ云フ、中宮(定子)ニ参

リ、明後日ノ賭弓ヲ見シガ為、又云フ、御所ニ参入セシムルニ
備ヘシガ為ト云々、后宮定メテ思シ給フコト有ル歟、

先にも触れた藤原登子は、姉の遺児、東宮守平の親代りとしての参内である。既に夫重明の死後の事でもあり、臣下の妻の参内と言うには当たらないであらう。また原子の参内については、記主藤原実資が言うように後の東宮参りを前提にした行動であったのかもしれない。ただ表向き理由はやはり「明後日ノ賭弓ヲ見シガ為」であったのだらう。唯一藤原伊尹女の例のみは、この年の十月廿九日に入内した低子の許へ行ったものと思われ、倫子の例に近い。

現在確認できている例はこれだけだが、後宮への出入りが内々の事として行われたため公式記録や男性官人の日記には記されなかっただけで、実際の事例はもっと多くあった可能性は十分に考えられる。このような場合確認は不可能であらうから、結局その実態は不明と言わざるを得ないであらう。

二、源倫子参内記事の位置付け

『栄花物語』は道長一族の栄華を叙述の核としており、倫子が道長の妻である以上、彼女に関する記事は一族の栄華を描く中の大きな要素を占めると考えられる。それでは先掲①⑦の参内記事は道長室としての倫子を描く上でどのような意味を持つのであろうか。

まず、物見のための参内である③を除いて、他の六例はすべて娘や孫たちの世話・介添えを目的とする点で共通している。②⑤⑥⑦のように公式行事である場合も①④のようにそうでない場合

も併せて、倫子の参内は一族の母として所生の子女や孫たちの後見をしている記事であると考えられよう。母親が子女の世話をするのは当然の事であり、その事自体に何ら問題はない。ただ、それが後宮という場所において行われている事に注目したいと思う。中でも問題となるのは、公式行事の際の付き添いなどではなく子女の世話そのものために参内している①④の二例である。

道長の政権は、言うまでもなく後宮を掌握し外戚の立場を不動のものとした事によって確立された。彼の政権は後宮にその基盤を置いているわけである。『栄花物語』はその事実上の始発である村上朝を描くに際し、天皇を中心とした後宮の様相を軸に描くという手法を取った。続く冷泉朝になって藤原氏の実権者に中心が移り、やがて道長が政権を確立した段階で後宮の掌握という命題は一応完成を見たとしてよいであろう。これにより物語中で後宮の持つ意味の重さは相対的に低下し、政争の舞台という意味合いを減じてゆく事となる。その分岐点は長女彰子が敦成・敦良の二皇子を出産し、次女妍子が東宮居貞の後宮に入り、更には第一皇子敦康親王の外舅である藤原伊周が失意のうちに薨去する巻八「はつはな」に求められよう。この巻まで政権は、敦康・伊周の存在、彰子に先んじて他の女御が男子を出産する可能性、といった不安定な要素を孕んでおり、彰子腹の二皇子の誕生と藤原伊周の死によりそれらが解消されるのはこの巻である。また倫子について言えば、彼女は巻三「さまじのよろこび」で初めて登場するが、「はつはな」の巻以前にその言動や様子が詳しく記される部分はほとんど無いと言ってよい。道長との婚や彰子・頼通らの出産、また父源雅言の薨去の時でさえ、描

かれるのは彼女ではなく周囲の人物たちである。やや詳しい心理描写などが見られるのは道長が源明子と通じる場面（巻三「さまじのよろこび」上巻一四頁）と、道綱室となっていた同母妹の死の場面（巻七「とりべ野」上巻二二～二三頁）くらいであろう。

これが「はつはな」の巻に入ると一変する。寛弘五年の京極殿の年始の様子を描いた場面（上巻二四九～二五二頁）では妍子・威子・嬉子らのとりどりの美しさが記されているが、これらは「とのゝ上は、かう君達あまた出で給へれど、たゞ今の御有様甘ばかりに見えさせ給」とすべて倫子に収束して行き、彼女の容貌が詳しく述べられた後、「見よ。かの母の御有様は如何見奉る。なか／＼御女の君達の御様には劣らぬ御有様にこそ若やぎ給へれ。猶御髪の有様よ」という道長の賛辞で締め括られている。また彰子が敦成を出産する場面（上巻二六二頁）では倫子が臍の緒を切る役を勤めているが、これについて物語は「これは罪得る事」と、かねてはおぼしめしかど、たゞ今の嬉しさに何事も皆おぼしめし忘れさせ給へり」と記す。ところがこの辺りの記事の原資料である『紫式部日記』にはこの一文が無い。臍の緒を切るのは忌むべき事であるという考えについても典拠が見出せず、どのような効果を狙ってこの一文を付け足したのかはよく分からないが、結果として、一族の命運を決めた慶事の中での倫子の存在が強調されている事は確かであろう。この後、五十日の祝の場面（上巻二七〇～二七三頁）では「宮（彰子）を女にて持ち奉りたる、鷹恥ならず。鷹を父にて持ち給へる、宮わろからず。又母もいとさいはひあり、よき夫持給へり」という『紫式部日記』でも著名な道長の褒美言が記されている。他にも五節の舞姫

に贈り物をする場面や故藤原為光四の君に出仕を慫慂する場面などが描かれ、また先掲①⑦の参内記事も四例までがこの巻のものであった。この巻から倫子はまさしく道長家の家刀自として活躍を始めているのであり、①④の二例はこのような流れの中に置かれた記事である。巻全体が道長一族による後宮の掌握を中心に据えて書かれ、更に、一族の母たる倫子の行動がそれまでとは比較にならない頻度と精度を以て書かれているのであるから、彼女の参内はそれらと連動するものとして捉えてよいのではなからうか。①④が共にこの巻に置かれた記事である点はやはり重要であると思われる。

後宮入りした女性の許をその肉親が訪れ世話をするというのは、たとえば『枕草子』などを見てもそう珍しい事ではない。ところが『栄花物語』では少し様子が違うのである。道長一族も当然皇妃たちの許へやって来ていたはずであり、現に道長自身の行動は『御堂関白記』によって数多く確認できるが、物語中にはその様子があまり描かれていない。たとえば巻八「はつはな」に年始のため参内した道長が彰子の許を訪れる場面があるが、彼女の容貌が長々と描写された後、「殿上へ参らせ給ぬ」とあって道長はすぐにその場を去っている（上巻二五一―二五二頁）。それに続くのが先にも触れた、一条帝自ら彰子懷妊を道長に告げる場面であるが、「殿参らせ給へる折」で始まる道長の訪問は一条帝との対話で終始しており、入れ替わって彰子の世話をしに行くのは倫子である（上巻二五二―二五四頁）。つまり道長は皇妃たちと対面しその世話をする事そのものを目的に参内しているのではなく、何か別の用事がある場合や別の話題の中で付加的に触れられている場合ばかりなのである。この他の

例も頼通・教通を含め大抵これと同種の記事ばかりで、寡婦となつた中宮妍子の御所の有様を記した部分に「又とのゝ君達などぞ、今少しものこまやかなることゝもは語らせ給ふめる」（巻十三「ゆふしで」上巻四〇二頁）とあるのが唯一の例外と言える。この場合、道長らの出入りはわざわざ取り上げるまでもなく自明の事であつたと考える事もできようが、それならば尚更、倫子一人がわざわざ取り上げられた事に注目せねばならないであらう。

特に巻八「はつはな」で、倫子がしばしば後宮に出入りしている様子が記されている事の意味は大きい。先述したように、この巻は後宮の掌握によって道長の政權が確立する巻である。その後宮に行き来しているのが倫子であり、実際にはあつたはずの道長らの出入りが正面から取り上げられていないという事は、後宮と道長家とを結ぶ位置に彼女がいる、『栄花物語』ではそのように描かれているという事になる。④にあるように「おぼつかなくならず」行き来する母の存在によって後宮と道長家とが連結しており、その様子を「めでたし」などの形容ではなく「いとあらまほしうなん」と評したこの物語の態度から、一族の栄華を支える一要素としての意味をそこに認める事ができるのではなからうか。平安貴族たちにとって後宮という場所の持つ意味が大きかった事を思えば、倫子の参内は、子女の世話を通じ一族の栄華招来に貢献する妻・母の姿として読み取り得るのではないかと思われるのである。

三、続篇における臣下の妻の参内概観

九十歳の長寿を保った倫子は、続篇に入ってもなお広く一族の後

見をする人物として登場し、その一環として後宮に出入りする記事も見えろ。次の二例である。

⑧ 卷三十二「調合」下卷三八二頁

常に中宮（威子）に上は参らせ給。七十に余らせ給へど、御髪はゆら／＼とふさやかにておはしますも、いとめでたくおはしましける御髪なればなるべし。

⑨ 卷三十四「暮まつほし」下卷四〇四頁

まことや、女院（彰子）は月日の行くも知らせ給はず、おぼしめし入らせ給へり。北政所も宮（威子）のおはしまししかばこそ、内にも参りしに思滞りしかとて、ひたぶるにそり捨てさせ給ておはします。

⑧ は長元九年の記事であるが、このすぐ後に後一条帝の譲位の意向と御悩とが記され、次の巻の巻頭で帝は崩御している。もはや中宮威子の男子誕生は絶望的と見てよい。従って、正篇における倫子の参内から考察したような意味はここには認められない。⑨の時点（長元十年）ではその威子も既に崩じており、倫子の娘たちのうち現存しているのは寡婦となつて久しい上東門院彰子のみである。もはや倫子が後宮に出入りする意味は消滅しており、それ故に彼女は「ひたぶるにそり捨て」てしまい、以後その参内記事は描かれな

替わつて、続篇では正篇に見られなかった他の臣下の妻たちの参内が描かれるようになる。隆姫女王（藤原頼通室 後朱雀中宮源子養母）・禊子内親王（藤原教通室 後朱雀女御生子継母）・修子内親王（後朱雀女御延子養母）・藤原祇子（藤原頼通妾 後冷泉皇后寛子母）・源麗子（藤原師実室 白河中宮賢子養母）・藤原良頼女（源

基平室 後三条女御基子母）らであるが、どれも後宮に入る娘の付き添いや外孫たる皇子の五十日の祝いなどの公式行事によるものであり、①④のような性質の記事はない。

続篇においては、公式行事などではなく娘たちの世話そのもののため後宮に出入りする妻の姿は遂に描かれなかった。続篇の叙述の散漫さに原因を求める事もできようが、むしろ、道長の後継者たちは外孫たる皇子の誕生に恵まれず、ために道長のような確固たる権力をつかみ取る事ができなかったからであるのかもしれない。後宮の掌握ができなかった摂関家にとって、両者を結ぶ妻の行動はもはやあまり意味のあるものではなかったのであろう。

四、女性に向かう視点について

『栄花物語』にみえる臣下の妻の参内について、源倫子を例に考察してみた。繰り返しになるが結論をここにまとめておきたい。

倫子の参内は、子女の世話をする母親としての姿が描かれた部分と言える。その事自体に何ら問題はないが、それが後宮という場所において行われている事に注意したい。道長の政権は後宮の掌握にその基盤を置いている。これは外戚による摂関政治という政治のあり方の基本形態であり、政権獲得のための大前提である。『栄花物語』もまたこの認識に立つて師輔―兼家―道長と続く九条家主流の歴史を辿ろうとした事は言うまでもない。

『栄花物語』正篇において、その後宮と道長家とを結んでいるのが倫子の参内である。実際には道長や頼通にも出入りしていたはずであるが、物語中には別の話題の中で僅かに触れられるに過ぎない。

殊に道長の政権が確立する巻八「はつはな」で、娘たちの世話そのものを目的として参内する姿が描かれるのは倫子一人である点を重視したいと思う。懐妊の世話であれ無聊の慰めであれ、彼女の参内によって後宮と道長家とが結ばれており、その点にこそ倫子参内記事の持つ意味があると考えたい。道長の栄華は倫子も含めた一族の栄華であり、それが後宮を基盤としたものである以上、そこに出入りする彼女の姿は、一族の栄華を支える構成要素の一つとして位置付ける事ができるのではないかと思われる。

そしてまた、道長が栄華に至る道程を描くに際し彼のみではなくその妻にも視線を注いだという点は、『栄花物語』が独自に採用した歴史叙述のスタイルと言えよう。確かに『大鏡』にも倫子は描かれているが、既に道長の権勢が確立した後で彼をめぐる挿話の一つとして登場するに過ぎない。『栄花物語』、特に巻八「はつはな」では、道長家の家刀自としての倫子の行動がそれぞれ独立したエピソードを構成して時間的推移の中に配置され、それらがまた相互に絡み合いながら、巨視的に見れば道長一族の栄華の一要素としても機能する仕組みとなっている。

道長の一族が摂関家の主流となつてゆく以上、その妻にも目が配られているのは当然の事とも言えよう。ただ、この事はどうやら他の人物にも敷衍できそうである。たとえば中関白家の栄枯盛衰を描いた部分で、道隆の妻高階貴子の占める割合は大きい。長徳の変の件など、むしろ伊周や隆家よりも多くの筆が彼女に費やされている。『大鏡』は彼女について学才に秀でていた事を記すのみであり、これと対照的であると言えよう。また後に道長家にとって最大の怨霊

となる藤原顕光についても、敦明親王東宮辞退事件から始まる一族の不運の中で、それと直接には関係のない彼の妻（もと藤原道兼室で顕光の後妻となった女性）とその連れ子の話¹⁵がかなりの分量を以て描かれている。この女性の場合、『大鏡』には登場もしていない。

藤氏の権力者たちの興亡を記すのに、当人のみではなくその妻にもスポットを当てて描くというのが、特に道隆以降には顕著に見られる『栄花物語』の傾向のようである。歴史を叙述する場合、よほど大きな事件でも引き起こしたのならともかく、臣下の妻の日常的な行動にまで目が配られる事はあまり無い。『大鏡』が彼女たちについてほとんど具体的な記述を持たないのは歴史叙述のあり方としてむしろ自然であり、『栄花物語』と同じく編年体の形式を取る六国史や私撰国史、更には男性官人の日記などでもこれは同じである。歴史を叙述する作品としては『栄花物語』にのみ顕著なこの傾向は、恐らく先行の物語類、特に『源氏物語』から継承したものであろう。それが、女性編作者の手によって書かれたという条件と相俟って、この作品独自のスタイルとして定着したものと思われる。通常の史書ではほとんど触れられる事のない妻・母という存在にも広く目を配りながら歴史を語ったという点は、『栄花物語』の功績の一つとして評価してよいであろう。女性の手によって描かれた歴史であるが故に、この物語で女性の占める役割は大きい。皇妃となった女性たちばかりではなく、臣下の妻たちについてももっと注目されてよいのではないかと思う。一族の栄枯盛衰の中で彼女らがどのような位置を占め、どのような役割を演じたか、『栄花物語』はそれについて大きな示唆を与えてくれる作品と言えよう。

注

- (1) 引用は岩波日本古典文学大系による。但し(一)内に語句を補い、私に傍線を付した。以下同じ。
- (2) 今小路覚瑞氏『紫式部日記の研究』以来、多くの論考がある。
- (3) ②は寛弘五年十一月十七日(『紫式部日記』・『小右記』)。「御堂関白記」同一条に「奉抱候御車母々并御乳母」とあるので倫子が付き添っていたのは事実であり、物語中にも「かくて十七日は入らせ給へければ」(上巻二七三頁)と明記されている。③は正しくは寛弘五年十一月廿八日の事(『紫式部日記』)だが、二日分の記事を併せて書いたため廿七日の事になった。「御堂関白記」『小右記』『権記』『日本紀略』にも出るが、倫子には触れられていない。⑥は寛仁二年の記事中にあり、「かくて二月になりぬれば」(上巻四一七頁)とある。但しこれは三月の誤りで、『御堂関白記』寛仁二年三月七日条に「母々供御衾」と見える。⑦は「年号替りて治安元年とぞいふ」「さて二月十余日に参らせ給ふ」(下巻三四頁)とあり年紀は明確だが、正しくは二月一日の事(『小右記』)。但し倫子には触れず。
- (4) 物語では長和三年の事となるが、この年の『小右記』・『日本紀略』に倫子や禎子内親王に関する記事なし。『権記』はこれ以前に記事が終わり、『御堂関白記』はこの年の記事を闕く。同書には翌長和四年三月十一日に乳母の軽服により禎子内親王が退出した記事があるが、倫子には触れていない。
- (5) 引用は和泉古典叢書により、(一)内に語句を補った。
- (6) 引用は新訂増補国史大系により、私に訓み下した。
- (7) 引用は増補史料大成により、私に訓み下した。以下同じ。
- (8) 引用は大日本古記録により、私に訓み下した。以下同じ。

- (9) 引用は新潮日本古典集成により、(一)内に語句を補った。
- (10) 福長進氏「栄花物語の叙述の機構」(『説林』三五号)
- (11) 卷十二「たまのむらぎく」上巻三七二頁・卷十三「ゆふしで」上巻三九八頁・卷十六「もとのしづく」下巻三六頁・同下巻四二〇四三頁・卷二十七「ころものたま」下巻二六三頁など。
- (12) 隆姫女王 卷三十四「暮まつほし」下巻四〇三頁
禊子内親王 同右巻四一二頁
修子内親王 同右巻四一四頁
藤原祇子 卷三十六「根あはせ」下巻四四六〇四四七頁
源麗子 卷三十八「松のしづえ」下巻四九一頁
藤原良頼女 同右巻四九三頁
- (13) 隆姫女王についてはもう一例、長久四年に一条院内裏が焼亡して高陽院が後朱雀帝の御座所となった時同居している記事が見える(卷三十四「暮まつほし」下巻四一七頁)が、夫頼通の邸である同院に彼女がいるのは当然であろう。『扶桑略記』同年十二月一日条・同廿一日条によれば二十日余りで帝は東三条第に遷御しており、高陽院滞在は一時的なものに過ぎなかった。参内記事とは認め難い。
- (14) 藤原良頼女の夫は源基平であり、摂関家とは無関係である。また源麗子のみは養女の中宮賢子が善仁親王(後の堀河帝)を生んだためその外祖母となったが、あくまでも養女であり、しかも物語は堀河帝即位後五年余りで終わってしまっている。
- (15) 前夫道兼の遺児であり后がねにもと思つて育てて来た娘を、倫子や威子の依頼により威子の女房として出仕させる彼女の苦悩が巻十四「あさみどり」に描かれている。